浅草寺西側商店街における街路と沿道店舗へのアクセスの関係に関する研究

ー 店舗への入店と立ち止まり行為を中心として ー

Keywords
公共空間　商店街
街路　　アクセス機能

DZ19605 松橋有理

1. はじめに

1.1　研究背景

都市空間は生活の場であり、中でも他者と交流する場所として公共空間が注目されている。従来、日本の公共空間は人口の増加や経済活動の急速な拡大、モータリゼーションの進展に合わせて設計されてきた。しかし、現在では人口減少や経済活動の成熟、モータリゼーションからの転換という時代背景のもと、ひとの活動に着目した公共空間が必要とされている[1)]。

公共空間の中でも都市の最も肝要な器官であり[2)]、利用者が多いのが街路である。ここでは街路を、「人が通行する環境であり、沿道施設と敷地境界線で区切られている範囲」を指すものとする。街路の機能には交通機能と空間機能があり、交通機能は通行機能・アクセス機能・滞留機能の3つに分けられる[3)]。ここでのアクセス機能とは、沿道施設への入りやすさのことを指す。例として店の間口が広いと店に入りやすいことや、店の前で立ち止まりができる空間が十分に確保されているから立ち止まりがし易い環境になることだ。

従来の公共空間としての街路の評価は、その通行機能や滞留機能に注目したものが多い。例えば、都市における公共空間の評価としては、歩行者の移動方向や速度に注目して駅前広場の利用状態を判別した益邑ら[4)]の研究やアクティビティ調査手法を用いてオープンカフェがどのように利用されているかを明らかにした泉山ら[5)]の研究がある。しかし、まちの賑わいや公共空間の評価を考える場合、アクセス機能についても考慮すべきと考える。それは、通行機能や滞留機能として評価されるのは、主として公共空間としての街路の「内部」であるが、アクセス機能の評価では、街路から沿道施設という公共空間の「外部」への影響とともに、沿道施設という「外部」から街路という公共空間の「内部」への影響という公共空間の周辺も含めた評価となるためである。

しかし、「外部」へも影響を与えるアクセス機能という視点で評価した研究はほとんど見当たらない。

1.2　研究目的

そこで本研究は、公共空間としての街路がもつアクセス機能に着目し、浅草寺西側商店街における公共空間である街路と私的空間である沿道店舗とのアクセスの関係について明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

2.1　研究対象街路

本研究の対象街路として、図1に示す浅草寺の西側に位置する3つの商店街を選択した。商店街を選択した理由は、アクセス機能が重視される街路と想定したからであり、浅草寺周辺には観光客や地元を対象とした商店街が多数存在する。今回取り上げる3つの商店街は、南から、「奥山おまいりまち通り」、「浅草西参道商店街」、「花やしき通り」となっており、東西方向にほぼ平行に並んでいる。

図 1　研究対象街路と周辺環境

図 1　奥山おまいりまち通り

研究指導：栗島英明 教授

Yuri MATSUHASHI

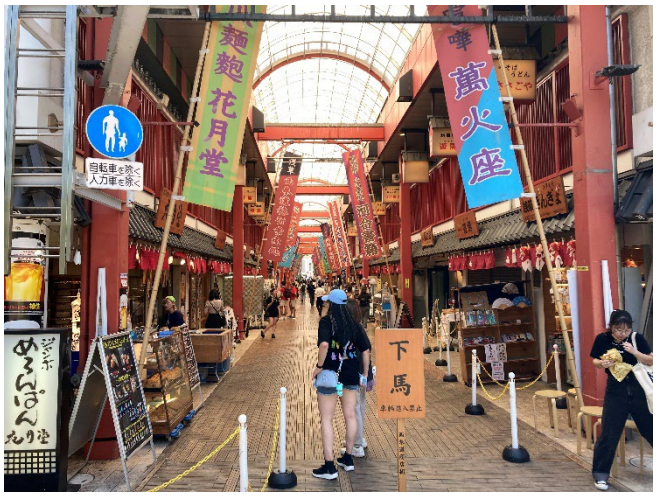

図 2　浅草西参道商店街

図 3　花やしき通り

2.2　調査内容

第一に、公共空間である3つの街路について調査を行なう。現地にて街路の全長、幅員、舗装、屋根や庇、街灯等の街路設備の調査を行う。

次に私的空間である沿道店舗について調査を行なう。店舗構成のほか、街路と店舗間のアクセスという観点から、店先の営業形態について類型を行う。類型は、店先での購買をする型(類型1)、店内での購買をする型(類型2)、店内で購買し、店先でも店内でも座席の利用が可能な型(類型3)、店内で購買し、店内のみでの座席の利用が可能な型(類型4)の4つに分類する。類型1は飲食スペースなどの座席が店舗側で用意されていない店舗を想定している。類型2は、類型1と違って購買行為が店内で行われるが、類型1と同じく店舗側が用意する座席が存在しない型を想定している。類型3は一般的な店先にも座席が存在する店舗を想定している。商品などが街路にしみ出している場合もこれに含む。類型4も類型3と同様に一般的な店内のみに座席が存在する店舗を想定して類型を設定した。

さらに街路と沿道店舗のアクセス機能の調査として、沿道店舗周辺の人のアクセス機能につながる活動を調査する。調査する人の活動は、入店、店先で立ち止まり看板や商品を見ることを対象とする。各街路においておおよそ3店舗ごとに10分の動画を撮影する。動画の撮影時間のずれによる影響を小さくするために10分の連続撮影とせず、1つ目の街路で5分の動画撮影を行った後、2つ目の街路で5分の撮影を行い、その後に3つ目の街路で5分の撮影を行なうことを繰り返して、各店舗の撮影時間の合計が10分となるようにする。動画から通過人数、各店舗への入店人数、店先で立ち止まった人数等をカウントし分析する。

分析方法はクロス集計として、各店舗前の「通過人数」と「入店人数」、「立ち止まり人数」を「街路名」「店舗の種類」「店先の類型」「向かいの店先の類型」「両隣の店先の類型」とクロス集計する。各店舗前ごとに通行量が異なることが予想されるため「入店人数」と「立ち止まり人数」を「通過人数」で割った「入店割合」と「立ち止まり割合」に関してもクロス集計する。

3. 結果と分析

3.1　対象街路の道路特性

全長は、3街路ともに100mないし100m強である。幅員は、花やしき通り、浅草西参道商店街はそれぞれ8m、7mであるのに対して、奥山おまいりまち通りでは10mと他の2つの街路より広くなっている。道路舗装は、花やしき通りがアスファルトに色がついているもの、浅草西参道商店街はひのきの木道である。奥山おまいりまち通りは、一般的な寺社の参道に舗装される敷石が街路の中心にあり、敷石の脇はブロック舗装となっている。屋根や庇に関しては、花やしき通りは壁面から2mほどの固定された庇がある。浅草西参道商店街は、全蓋式アーケードが設置されている。奥山おまいりまち通りは、壁面から2～4mに開閉できる庇が設置されており、悪天候時や日差しの強い時間帯に開いている。街灯は、花やしき通りには街路を明るくする目的の街灯はなく、看板や花やしきの壁面を照らす照明のみがある。浅草西参道商店街は、アーケードに照明が設置されており街灯の役割を果たしている。奥山おまいりまち通りでは一般的な街灯が設置されている。

3.2　対象街路店舗構成

対象外路の店舗構成について図5に示す。3つの街路全てにおいて飲食店が最も多く存在する。花やしき通りは花やしきというテーマパークに隣接しており、入場口が街路に面している。また、9の店舗があるが、民家も点在しており他の2つの街路と比べると店舗の連続性がない。浅草西参道商店街には3つの街路で最も多い37店舗が存在する。土産物に分類される店舗が多く、間口の狭い店舗が多くを占めている。衣料品店の集合した場所では、外国人観光客向けの衣料品を販売している。奥山おまい

りまち通りには15の店舗があるほか、木馬亭という劇場がある。間口は、浅草西参道商店街と比較すると広い。また、奥山おまいりまち通りにも衣料品店があるが、外国人観光客向けではなく、近所に住む人が利用するような日本人向けの衣料品を扱っていた。

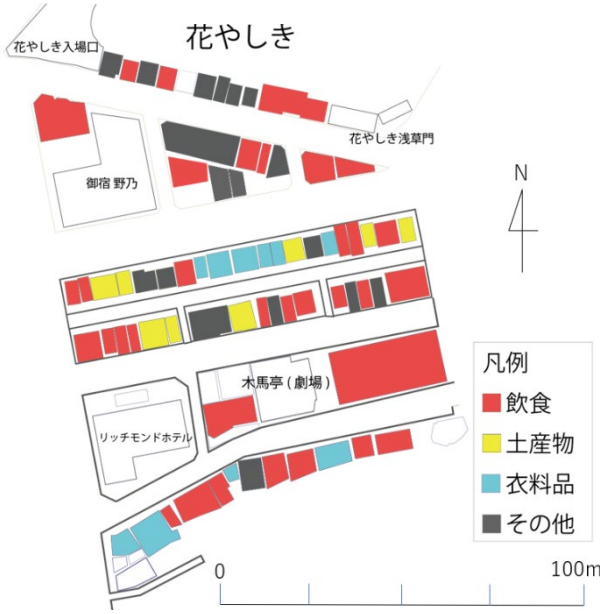

図 5　対象街路の店舗構成

3.3　沿道店舗店先の類型

沿道店舗の店先類型の調査結果を図6に示す。類型1は街路空間（公共空間）と店舗内空間（私的空間）が明確に区切られていることを表現するために店舗の敷地境界線を太くした。類型2は、街路空間が店舗内空間に入り込んでいる様子を表現するために店舗利用者が入り込む領域を白抜きにした。類型3は、街路に店舗空間がしみ出していることを表現するために店舗の敷地境界線からはみ出した表現とした。類型4は店舗空間で購買が完結するため店舗に色を付けることとした。

調査の結果、類型2が最も少なく、次いで類型1と類型4が少ないことがわかった。最も多いのは類型3であった。浅草西参道商店街と奥山おまいりまち通りでは、類型3の店舗が連続している場所があった。また、通りの端の店舗は、店先に染み出すことが少なかった。奥山おまいりまち通りの東側は、街路にしみ出す類型3が連続しており、そのうち2店舗では店先での販売（おでんやもつ煮など）も行っていた。

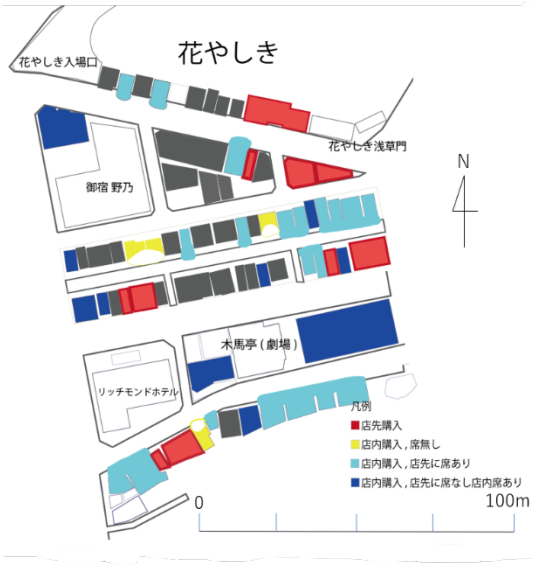

図 6　沿道店舗の店先の類型

3.4　沿道店舗への入店・立ち止まり

各街路と店舗前の通過人数に関してt検定を行ったところ、奥山おまいりまち通りに対して花やしき通りと西参道商店街は有意確率<0.05となり、統計的に通過人数の差があることがわかった。一方、花やしき通りと西参道商店街の通過人数は有意確率>0.05となり、統計的には通過人数に差があるとはいえない。

次に街路から沿道店舗へのアクセス量を示す指標として、各街路の入店人数と立ち止まり人数の平均と標準偏差を表1・表2に示す。

表1　入店数の平均・標準偏差

	花やしき	西参道	奥山
平均(人)	4.71	1.94	4.06
標準偏差	5.39	2.85	5.38

表2　立ち止まり数の平均・標準偏差

	花やしき	西参道	奥山
平均(人)	12.57	6.47	9.50
標準偏差	9.39	6.14	10.34

街路ごとに沿道店舗数に差があることなどから、正規分布でないため、ノンパラメトリック検定のKruskal-Wallis検定を行った。先述のように街路ごとに通過人数に差があるから、入店人数・立ち止まり人数ではなく通過者のうちの入店割合・立ち止まり割合を用いて検定を行った。

検定の結果、店舗の種類によって入店割合・立ち止まり割合に差があることがわかった。まず、店舗の種類と入店割合では、衣料店と飲食（食べ歩き）、および飲食（居酒屋など）と飲食(食べ歩き)で有意差が認められた。店舗の種類と立ち止まり割合でも同様に、衣料店と飲食（食べ歩き）、飲食（居酒屋など）と飲食(食べ歩き)で有意差が認められた。

それ以外の3つの街路、店先類型と入店割合・立ち止まり割合の検定では、統計的な有意差を確認することはできなかった。

4 考察

以上の結果から、街路からの入店・立ち止まりに影響を与えているといえるのは、店舗の種類である。飲食（食べ歩き）の店舗は、SNSなどで有名な店があることや、調査の時間帯（13:30~15:00）によって他の店舗の種類よりも入店・立ち止まりが多くなったと考えられた。一方で街路や店先類型については、統計的には有意差を確認できなかったが、これについては、アクセス機能に差がないというよりは、3つの街路の沿道店舗数の差が大きいことや、店先類型数に比して全体のサンプル数が少ないためと考えられる。

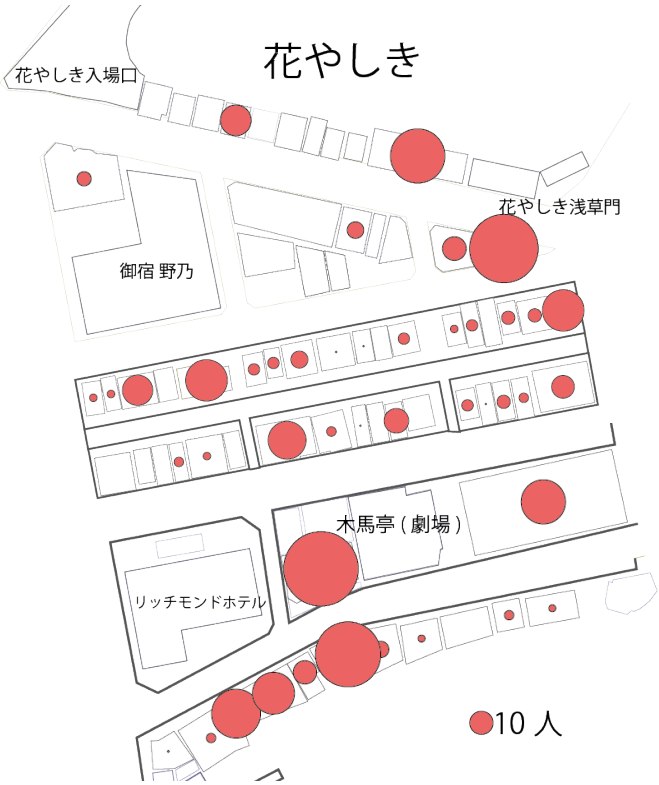

図７　対象街路店舗ごと立ち止まり人数

また街路ごとの立ち止まり割合は、統計的な有意差を見出しえなかったが図7に示すように街路ごとに立ち止まり人数の多い店舗が点在している。本研究で対象とした街路の沿道施設は、ホテルや劇場もあるが店舗が大半を占めており、沿道店舗の実際の収益につながる入店・立ち止まりの実数にも注目する必要がある。先述のように奥山おまいりまち通りと他２街路との間には通過人数において有意差があり、それが立ち止まり人数において可視化されたと考える。

街路ごとの通過人数の差が生まれた要因の一つは、街路の位置だと考える。奥山おまいりまち通りは浅草寺の参拝が終わって西方向に最も接続が良い街路であり、六区ブロードウェイに直結する通りである。西参道商店街は浅草寺からの接続も良好では有るが、西参道商店街の西側にWINS（場外馬券売り場）が壁のように建っており西からのアクセスが悪い。また、花やしき通りは浅草寺からの接続が悪く、西に抜けると浅草ひさご通り商店街という新仲見世や六区ブロードウェイと比較すると地元向けの商店街に繋がっており、花やしきを訪れる観光客以外はあまり通過しなかったと考えられる。

5 まとめ

本研究では、街路のアクセス機能に着目し、浅草寺西側商店街を中心に街路と沿道店舗のアクセスの関係を分析・考察した。アクセス機能があることで発生する沿道店舗への入店・立ち止まり行動を調査することから、入店・立ち止まり行動は店舗の種類に影響を受けることを明らかにした。中でも食べ歩き向けの飲食店において入店・立ち止まり行動が多く発生することを明らかにした。沿道店舗の実際の収益につながる入店・立ち止まり行動の数にも注目する必要があると考え、その立ち止まり行動の数を可視化した。また、街路ごとの通過人数に有意な差があることを明らかにした。

今後の課題として、よりサンプル数を用意した場合の店先の類型と入店・立ち止まりの関係の分析や、浅草寺という大きな観光地がない、一般性に富んだ街路を対象に街路と沿道店舗と入店・立ち止まりの関係を分析・考察することが挙げられる。

参考文献

1) UR都市機構まちの空間形成イノベーションワーキングチーム 2021. 居心地がよく、使われる公共空間を作るためにープレイスメイキングから考えるまちづくりーver.2.0. https://www.ur-net.go.jp/aboutus/action/placemaking/lrmhph000001y14u-att/PLACEMAKING_HONSATSU_20210914.pdf,2023年7月20日閲覧
2) J・ジェイコブズ著, 黒川紀章訳 1977. 「アメリカ大都市の死と生」鹿島出版会
3) 一般社団法人交通工学研究会,交通工学用語集,通行機能 http://glossary.jste.or.jp/%E9%80%9A%E8%A1%8C%E6%A9%9F%E8%83%BD/,2023年7月20日閲覧
4) 益邑明伸, 佐土原聡 2022. 歩行者軌跡データに基づく公共空間の利用状態の判別手法の提案. 日本建築学会計画系論文集, 87(792), 476-486.
5) 泉山塁威,中野卓,根本春奈 2016.人間中心視点による公共空間のアクティビティ評価手法に関する研究ー「池袋駅東ログリーン大通りオープンカフェ社会実験2015年春期」のアクティビティ調査を中心にー, 日本建築学会計画系論文集, 81(730), 2763-2773